



化石館だより

コラム

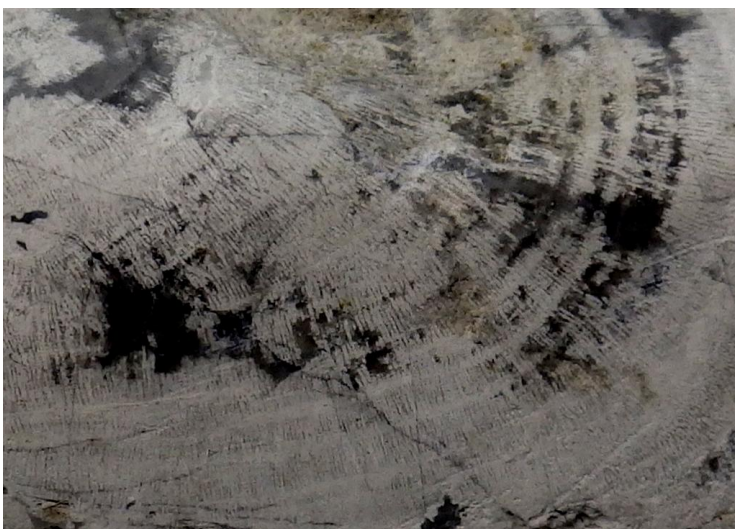
金生山の層孔虫化石 再発見か？

金生山化石研究会の月例会で思わぬ発見がありました。その月例会では「海綿」や「層孔虫」の化石が話題に上がっていました。金生山ではかつて層孔虫の化石が発見され記載されているという話をしていた時、会員の一人が「以前から展示してあるこの化石が層孔虫ではないのか」とつぶやいたことがきっかけで確認することになったのです。その化石には二枚貝というラベルが付けられ展示されていたのですが、以前から「同定の誤りではないのか」と問題視されていたものでした。



展示ケースから取り出し改めて観察してみると、やはり二枚貝ではないようです。ルーペで確認して驚きました。二枚貝の殻に刻まれている成長線と思われていた部分には、正に層孔虫を思わせるピラーとラミナからなる縦横の骨格構造が明確に浮き上がっていたのです。その様子は、解説書や資料としていただいていた Nicholson の図版に示されている層孔虫の構造にとてもよく似ているのです。

上：二枚貝として展示されていた化石
下：上写真の四角部分を拡大



層孔虫という生物は一般には馴染みのない生物ですから、名前を聞いたことが無い方もおられるでしょう。層孔虫はストロマトポロイド類とも呼ばれ、古生代と中生代に生息していた動物です。層孔虫は絶滅種であることから不明なことも多く、学者によって海綿類、ヒドロ虫類、サンゴ類、コケムシ類など様々な仲間に分類されてきました。現在ではヒドロ虫類に分類されることが多いようですが、海綿類に近いとも言われており、その関係は定かではありません。

層孔虫の仲間は古生代オルドビス紀の中期に出現しました。特に繁栄したのはシルル紀、デボン紀、ジュラ紀で、この時代には層孔虫によって形成された生物礁が確認されています。層孔虫には古生代型と中生代型の二つのタイプが知られていて、古生代型は石炭紀からペルム紀にかけて衰退し、ペルム紀末に絶滅したと考えられています。また中生代型は、三畳紀に出現し、ジュラ紀に繁栄しますが白亜紀末に絶滅しています。金生山の赤坂石灰岩が堆積したのはペルム紀の中期から後期にかけてですから、ちょうど層孔虫がいなかった時代に当たります。

金生山では、1930年に矢部久克・杉山敏夫が *Storomatopora (Ppararellopora) minoensis* を記載しています。しかし、この化石は「真の層孔虫」ではないという見方が示されており、世界的にもこの時代の層孔虫化石がほとんど発見されていないことから、金生山の石灰岩が堆積した時代には古生代型層孔虫が絶滅していたと考えられてきました。海綿化石も同様ですが、層孔虫化石は採集しようという興味あまり湧かないようです。そのためか海綿や層孔虫の化石の多くが見捨てられてきたように思われます。

今回展示化石の中から発見された「層孔虫と思われる」化石が「真の層孔虫」化石であれば、矢部・杉山の記載から88年を経ての再発見ということになります。

さて真実はどうなのでしょう。大変興味深いことですね。

(文責：高木洋一)

お知らせ

前期 企画展



「金生山の大理石と石細工」をテーマに、前期の企画展を開催しています。他では見られない金生山の色彩豊かな大理石とこれを用いた石細工の作品を是非ご覧ください。



期 間： 5月3日(木) ～ 9月3日(月)

場 所： 金生山化石館 2階展示室

入館料： 100円 高校生以下無料

休館日： 火曜日(祝日の翌日：その日が土・日の場合は月曜日)

自然講座の開催

7月の8日・15日・22日の午前中に開催します。顕微鏡を用いて微化石を採集したり、鉱山から提供していただいた石灰岩から化石を探したりします。詳しくは金生山化石館へお尋ねください。

問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)

Email kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp